

## 鈴木真弥著 『現代インドのカーストと不可触民 -- 都市下層民のエスノグラフィー』 (書評)

著者	篠田 隆
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	58
号	2
ページ	173-177
発行年	2017-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00049199">http://hdl.handle.net/2344/00049199</a>

鈴木真弥著

『現代インドのカーストと  
不可触民——都市下層民のエ  
スノグラフィー——』慶応義塾大学出版会 2015年  
viii+278 ページしの だ たかし  
篠 田 隆

## はじめに

インドの独立（1947年）以降の不可触民<sup>(注1)</sup>の状況を規定するもっとも重要な要因は、インド憲法（1950年発布）における不可触民差別の禁止と歴史的な被差別集団に対する留保制度を含む優遇措置が設定されたことである。同時に、1940年代から60年代にかけて、不可触民に課されていた諸種の慣行権<sup>(注2)</sup>の廃止立法も成立した。このように、憲法や各種立法による制度変革が先行するなか、留保政策の受益者が一定程度増加し、彼らがダリトの政治経済社会発展にどのように貢献できるのかが、エリート・ダリト論の一環として注目されている〔篠田2016a〕。

エリート・ダリトの意識や運動には世代差がある。ダリト運動の中心地であるマハーラーシュトラ州ナーグプルのダリト運動活動家によると、第1世代は、アンベードカルと同時代の世代で、ダリトとしての意識形成が重要な課題であった。第2世代は、留保制度の活用と人権保護が進んだ世代であり、1970年代にはダリト・パンサーなど、闘争的な運動も行われた。1990年代以降の第3世代のもとでダリト運動は多様化し、従来の運動に批判的な運動を含め、諸種の教育経済運動があらわれた。そのなかで、留保制度の受益者がその成果を自己のコミュニティに如何に還元するのことも重要なイシューとなった<sup>(注3)</sup>。このエリート・ダリトの世代区分を援用するならば、本書は大都市デリーの清掃カーストの第3世代を対象とした研究であると位置づけるこ

とができる。

## I 本書の概要

本書はデリーの清掃カーストを事例として現代インドにおけるカースト問題、とりわけ不可触民制からの解放とは何かというテーマを追求した著作である。全8章中、第1章から第4章までは文献調査の成果、第5章から第7章までは実態調査の成果を中心に構成されている。第8章はまとめの章である。

文献調査では、カースト論の検討、調査地の素描、清掃カーストの実体化、不可触民解放の思想と運動の分析を行っている。まず、第1章のカースト論の検討では「カースト研究」、「不可触民研究」、「清掃カースト研究」の3レベルで先行研究を整理している。「カースト研究」では、カーストをヒンドゥー教に固有の現象と捉える学説、イギリスの植民地下で再構築されたとする学説、一種のエスニック集団のような文化的・社会的集団とみなす学説に分類し、各々の利点と限界を論じている。不可触民研究については、脱ヒンドゥー教を志向する「断絶論」やヒンドゥー教の理念が不可触民に内面化するとみる「合意論」ではなく、両者の側面を併せ持つ「両義的立場」が有効であると主張している。第2章は調査地である「デリーの横顔」を扱う短章である。第3章では、インド社会における不可触民の起源とのかかわりで、イギリス植民地期の1930年代から導入されたSC（Scheduled Castes: 指定カースト）概念により、不可触民が一種の「公的カースト」として位置づけられ、それが独立後も福祉政策の受益集団として制度化されていること、この過程で、カーストと職能集団との一体化が強化され、「カーストの実体化」という現象が生じたことが強調されている。このカーストの実体化論は、本書の文献研究のなかでもとくに重要な主張となっている。さらに、第3章ではデリーにおける指定カーストの内的格差が国勢調査結果に基づき検討され、チャマルが伝統的職業である皮革業から離脱し教育水準も高いのに対して、パールミーキ（清掃カーストの自称/他称としてのカースト名）は清掃業に留まるとともに教育の指標も低いことが指摘されている。第4章では、不可触民解放の運動と思想の流れを整理し、ヒンドゥー教の枠組みのなかでの改革を志向したガー

ンディー (Mohandas Karamchand Gandhi, 1869～1948年) とヒンドゥー教を脱しての改革を希求したアンベードカル (Bhimrao Ramji Ambedkar, 1891～1956年) を対比させている。著者は、ガンディーの改革は受益対象者を屎尿処理人に限定し、不浄な職業の近代化に特化した内容であり、不可触民制からの解放にそぐわないとして批判している。

後半の実態調査の結果分析の諸章では、調査対象世帯の社会経済分析、意識とアイデンティティの聞き取り調査、清掃カーストの組織化と運動の分析が行われている。このうち、意識調査と運動を考察した第6章と第7章の2つの章が本書のなかでもっとも独創的で重要な貢献となっている。

まず第5章では、予備的考察として世帯調査の結果を分析し、組織部門における清掃業への集中傾向が依然として高いこと、女性労働者は組織・非組織部門の双方で清掃業に集中していること、清掃業からの離脱が期待されるほど進んでいないこと、経済自由化の政策転換の影響により清掃部門で雇用の不安定化が進んでいること、内婚率は依然として高くカーストの根本的な構造は維持されたままであることを確認している。続く第6章での聞き取り調査では、進学、結婚、就職などのライフステージの節目に現出する困難や葛藤に焦点を当て、多くのダリトが出自カーストへの意識を強くもちながら、学歴と良い職業への就職を足掛かりに、次世代に希望を託したいと願っていること、ロールモデル意識を強くもつ高学歴者が清掃カーストの運動の主要な担い手であることを明らかにしている。また、ヴァールミーキ詩聖 (詩聖名についての著者の表記に従う) 崇拜が自尊心の拠り所になり、集団の結束を強化するうえでのアイデンティティの基盤になっていることも確認している。第7章では、現地調査に基づき清掃カーストの組織化と運動を分析している。彼らの運動の特徴として、個別のカーストごとに運動が分散化していること、留保制度の受益者のなかで出自を明かし積極的に運動に関わる「エリート・ダリト」が運動の主導権を握っていることが明らかにされている。彼らの運動は当初、宗教的救済や既存の政治勢力に依存していたが、1990年代前半を境に、清掃労働者組合は衰退した。それに代わり、公益訴訟が新たな形態の運動として展開した。このように、実態調査を通して「エリート・ダリト」の意識、運

動における役割と戦略が中心的な課題として考察されている。

最後の第8章では、本研究の主要な論点と成果がまとめられ、残された課題として、他の不可触民カーストとの比較研究、および反カースト運動のグローバル化の解明が挙げられている。

## II 本書の意義

本書の第1の貢献は、清掃カーストのなかで固定的宿命的とみなされてきたカースト観がゆらぎ、新たなアイデンティティが形成される端緒を、彼らの意識と運動のなかに見出していることである。意識や運動の「兆し」の段階に注目する研究方法は新鮮である。もちろん、カーストから逃れられないという葛藤が強烈であることもよく描かれている。

第2に、これまでの清掃カースト研究は、雇用・労働条件の解明に集中する傾向にあった<sup>(註4)</sup>のに対して、本書では信仰、葛藤、抵抗を含む内的側面に踏み込んでおり、彼らの意識や精神世界についての理解が深まっている。聞き取り調査における著者の姿勢はしなやかで共感的であり、回答者の本音を引き出すのに成功している。

第3の貢献は、清掃カースト上層の事例研究として、「エリート・ダリト」論の観点から留保制度受益者の立場や行動を分析していることにある。著者はエリート・ダリトのロールモデル意識や、彼らが清掃カーストの組織化と運動に果たした役割を積極的に評価している。また、近年における新たな運動として、社会正義の実現手段としての公益訴訟に注目し、突破口としての司法の可能性を検討している。

## III 本書の課題

本書には大都市に居住する上層の清掃カーストの意識と行動に関する優れた観察と分析の結果がまとめられている。ただし、不十分な点や今後より深めてほしい論点があるので、それらを課題として提示したい。

第1は、調査対象世帯の分析において、世代間、都市農村間のモービリティについての考察が不足しているように思われる。このため、エリート・ダリトの形成過程が十分に捉えられていない。留保制

度の活用が鍵になっていることは強調されているが、世代をこえて、どのように上昇してきたのか、その際の鍵になる要因や環境についての検討が十分ではない。とりわけ、エリート・ダリトに上向する端緒を切り開いた最初の世代が直面した課題と状況、それにどのように対処したのかの解明が重要である。

清掃カーストの場合は、慣行権の存在が彼らのモービリティを制約する大きな要因となってきた。農村部においては、尿尿処理や清掃労働のみならず、諸種の雑役（動物の死体処理など）がしばしば強制され、都市部の自治体に雇用される清掃労働者の間では、新たな慣行権の創出（世代をこえた清掃労働者としての雇用を確保するための補償的雇用制度の要求など）が関心事となってきた。慣行権は清掃カーストの労働と生活を規制するだけでなく、地域社会のなかでの彼らのアイデンティティを決定的に左右してきた。アンベードカルが慣行権の廃絶を被抑圧階級（depressed classes）発展のためのもっとも重要な戦略的目標に掲げたのも、このためである<sup>(註5)</sup>。エリート・ダリトに上向する過程で慣行権とどう向き合ってきたかが解明できれば、彼らの意識とアイデンティティをより深く理解できるであろう。

さらに、意識や渴望、葛藤、社会組織とその役割の時代的变化を考察するのであれば、調査対象者の枠を越えてパールミーキの刊行する雑誌や新聞などの関連資料を発掘し参照すべきであった。

第2は、「エリート・ダリト」がコミュニティの向上に果たす役割と限界についてである。著者は、1990年代半ば以降に清掃労働者組合は衰退し、それに代わり公益訴訟の展開がみられたこと、その担い手は弁護士や上級公務員であり司法の場に救済を見出していることに特徴があるとしている。公益訴訟では、(1)尿尿処理と乾式便所の全廃、(2)SC留保政策の改正、の2つの事例が紹介されているが、この事例が実効性をもつのかどうかは不確かである。たしかに、公益訴訟は経費も人員も抑えることができ、訴訟の進展や判決はメディアに報道されるなどの利点をもつが、毎年多数申請される案件のなかで清掃カーストに関わる訴訟がどの程度出されたのか、本当に重要な問題が扱われているのか、どれほどが受理されたのかの全容が把握されていない。現時点でわかっていることは、清掃カーストに関連する公

益訴訟は非常に少数であることである。このため、公益訴訟が司法救済の突破口になりうるのか、見通しは必ずしも明るくはない。

第3は、清掃カーストと他のダリトとの社会経済的上昇のための戦略の相違についてである。著者自身が他の不可触民カーストとの比較分析を課題と位置づけているので、ここでは近年の議論を紹介し、清掃カーストとの違いを検討する。

他の有力な指定カーストの場合には現在、民間組織部門への進出が重要な課題となっている。留保制度による進学や公務職への進出には限界があり、高等教育を修了しても組織部門での雇用が確保できない状態にある。このなかで、公務職だけではなく、民間組織部門への就職についても留保制度を設けるべきとの主張が出てきている。この関連で、Thorat and Sadana [2009] はマレーシアにみるような私的資本の再分配政策（マレー人優遇政策）も有効だと述べ、指定カースト・指定部族に対する過去の財産否定への補償政策として、彼らの私的資本を強化するための特別な補償手段と、市場非市場での差別に対する積極的な防護策が必要であると主張している。他国との比較を意識し、民主主義とアフーマティブアクション（補償的差別）の観点から、新たな戦略が模索されている。

さらに近年、「被雇用よりは雇用を」のスローガンのもと、SCの多くが従事する自営業の成功とダリト経営者の育成発展を奨励する思想や戦略、それを実現するための商工会議所設置などの運動が展開している。DICCI (Dalit Indian Chamber of Commerce and Industry: ダリト・インド商工会議所) のイデオログであるプラサード (Chandra Bhan Prasad, 1958年～) は、「資本主義はカーストと戦うもっとも確実な手段である。…ダリトの資本主義は差別体制に対する打開策である」と述べ [Gatade 2013], 資本主義やグローバル化に経営者として積極的に参与することの意義を強調している [篠田 2016a]。

このように、他の有力な指定カーストと清掃カーストのエリート・ダリトの間では、発展のための戦略が大きく異なっている。さらに、ダリト内部の有力カースト間での主導権争いは激烈で、互いに足を引っ張り合っている。同じカースト内部でも分断化やイシューの個別化が進行しており、ダリト内部の

結束を固めることがダリト全体の発展のための喫緊の課題となっている。

アンベードカルの思想と業績（とりわけ憲法の起草や民主主義の枠組みづくりへの貢献）は、ダリトの指導者としての役割をこえて、より広範な社会集団に積極的に評価されるようになっていく。ダリト内部においても、アンベードカルは解放運動の精神的支柱として信奉されており、DICCIも商工会設立の意義と目的をアンベードカル思想と関連づけている〔篠田 2016a〕。いずれの指定カーストにおいてもエリート・ダリトが運動の主導権を把握する状況のなかで、これまで実現できなかったダリト内部の結束がはかれるのか、その際にアンベードカル思想は結束を促す思想やビジョンたりえるのか、政府や民間からのさまざまな優遇政策の譲歩を勝ち取り、司法闘争を勝ち抜く力となるのか、注目したい。

以上、若干の疑問点と要望を記したが、それにより本書のもつ意義が損なわれるわけではない。本書は、清掃カースト研究、不可触民研究に一石を投じた好著であり、研究者はもちろん、現代インド社会に関心のある一般読者にも広く読んでもらいたい。

〔注1〕「不可触民」は、インドのカースト制度の最底辺に位置づけられてきた集団のことを指す他称である。イギリスの植民地時代には、英語でアンタッチャブル (untouchables) と表現された。この集団は、歴史上さまざまな名称で呼ばれた。たとえば、M. K. ガンディーは、この集団をハリジャン (harijan: 神の子) と呼んだ。留保制度の対象とされる不可触民は、行政用語では「指定カースト」(scheduled castes) と呼ばれた。政府が作成した留保制度の受益集団のリスト (schedule) に記載されたカーストという意味である。最近では、ダリト (dalit: 抑圧された者) の呼称が一般的になっている。ダリトの呼称の起源については諸説あり、① 19世紀のマラータ人社会改革家フレー (Jyotirao Phule, 1826~90年) が、インド社会で抑圧されている人々の解放運動のなかで、不可触民を「カースト社会のなかで抑圧され分断された犠牲者」との意味でダリトと呼んだことに遡るとの見解、②アンベードカルが広めたとする見解 (ただし、

彼は彼の編集した新聞記事の一部でダリトの用語を使用しただけで、通常は「被抑圧階級」や「指定カースト」と表現した)、③独立後の1958年、「マハーラーシュトラ・ダリト文学協会」の初会合で「ダリト文学」との表現が使用されたのが端緒となったとの見解、④アメリカでの「ブラック・パンサー」運動 (1966~82年) の影響の下、1972年にムンバイで開始された「ダリト・パンサー」運動 (1972~80年代) がダリトの呼称と用法を国内外に普及させたとの見解がある。抑圧をはねのけて前進していこうという意味合いを付与された呼称である。ダリトを自称として使う人もいれば、他称として用いられることもある (以上の詳細は、篠田 [2016b] を参照のこと)。本書での呼称は文脈に応じて使い分けられているので、評者もそれに従う。

〔注2〕慣行権 (customary right) とは、村落内・間分業の一環として、一定の伝統的職業に従事する職人・サービスカーストが農民に対して財やサービスを提供し報酬を受け取る権利義務関係を示す用語である。大工、床屋、司祭などの職業は慣行権をもつことが多かった。不可触民に対しても慣行権が設定され、清掃や死牛処理など不浄だとみなされるサービスを農民・村民に対して提供する義務を負った。独立前後に、雑多な種類の労働・雑業の「慣行権」が法律で廃止されたが、死牛処理や清掃などの公衆衛生と関わる活動、あるいはドラムたたきなどの儀礼に関わる活動については、現在でも村の支配層から強制されている状況がある〔篠田 2016b〕。清掃カーストの慣行権の形成と展開については、篠田 [1995]、Shinoda [2005] を参照のこと。

〔注3〕ナーグプルのインド平和センター (India Peace Centre) 所長の John Chelladuray 氏からの聞き取り (2012年3月13日)。ダリト指導者の世代差については、後にグジャラート州のダリト社会活動家である Ramesh Parmar 氏からも同様の見解を伺うことができた。

〔注4〕独立以降に設立された尿処理労働に関する諸種の調査委員会報告書を受けて、インド政府は尿処理労働とりわけ尿尿をいれた策を頭上で運搬する慣行をインド社会の悪 (evil) と宣言し、その根絶を

目指すとともに、清掃労働者の雇用・労働条件の改善に取り組んだ。この視点からの邦文研究には、篠田 [1995]、三宅 [2008] がある。

(注5) アンベードカルは不可触民の独自性と置かれた状況を端的に指し示す概念として「被抑圧階級」を使用した。それには、アンベードカルの出自カーストであるマハールも含まれた。戦略の詳細は、篠田 [2015] を参照のこと。

### 文献リスト

#### 〈日本語文献〉

- 篠田隆 1995. 『インドの清掃人カースト研究』春秋社.  
 —— 2015. 「アンベードカルの「マハール・ワタン」廃止論 ——ボンベイ世襲的官吏法改定案にみる問題認識と戦略——」『東洋研究』(196) 1-27.  
 —— 2016a. 「インドのダリト経営者と商工会議所」『部落解放』(723) 40-51.

—— 2016b. 「不可触民と慣行権——清掃カーストの事例——」『部落解放と大学教育』(29) 9-25.

三宅博之 2008. 『開発途上国の都市環境——バンガラデシュ・ダカ持続可能な社会の希求——』明石書店.

#### 〈英語文献〉

- Gatade, Subhash 2013. *Defying Manu, Bowing to Mammon: On the Silent Emergence of Dalit Capitalism*. New Delhi: Institute for Social Democracy.  
 Shinoda, Takashi 2005. *Marginalization in the Midst of Modernization: A Study of Sweepers in Western India*. New Delhi: Monohar.  
 Thorat, Sukhadeo and Nidhi Sadana 2009. "Caste and Ownership of Private Enterprises." *Economic and Political Weekly* 44(23): 13-16.

(大東文化大学国際関係学部教授)